出会い　ふれあい　助け合い

サロン・あべの

<サロン・あべの>NO．47　　平成　2年　5月19日（土）発行

OMNIMAX オムニマックス & PLANETARIUM プラネタリウム

＜サロン・あべの＞4月の出会い

前夜からの雨も昼前には上がり、新緑の優しいそよぎが渡る、平成二年四月二一日（土）午前十二時、育徳コミュニティーセンター玄関前に集合、リフト付きバスで市立科学館へ。

ピンクの可愛い制服を着たコンパニオンの案内で、サイエンスシアターへ入場。

☆★オムニマックス映画

「One day in Osaka」

圧倒的な超大型映像「オムニマックス」が巨大なドームスクリーンいっぱいに映し出す素顔の大阪。私たちがいつも見ている大阪の表情を空から眺め、高く低く旋回しながら風景が移っていく。本町、道頓堀、中之島、住吉神社の太鼓橋、動物園等々。鳥になったような感覚を持ったかと思う間もなく、次は船上から両側のビルを見上げたり、橋をかいくぐったりして、大阪を捉える。この六分の間に、人々の暮らしと自然とのつながり、動と静が交鎖する大阪の姿をかい間見ながら、未来の大阪の姿を想像した。

「グランドキャニオン」

アメリカ・アリゾナ州西北部を流れるコロラド川によって浸食されて出来た大峡谷「グランドキャニオン」を、紀元前の歴史からひもとき、インディアン達の生活・生物の営み・自然の推移・未踏の地の探検等々を空から、地上から、水面からと臨場感いっぱいに映し出されていく。大空を舞う鷹のごとく、ゆったりと下界を眺めると赤土と絶壁の岩壁の間をぬって水量豊かなコロラド川が、うねっている。かと思うとゴウゴウと流れる、荒れ狂う急流に身をまかせて大岩を右に左に避けて船（探検隊の）がいく。

探検など歴史の再現シーンや大自然のすばらしさを感動のスペクタクルで描いていく。

生物の存在など全く感じさせないグランドキャニオンだが実際には、様々な生き物の営みがあり、人と自然の関係は、今も昔

もこれからも、変ることなく一つの地球ドラマとして、様々に展開されていることを三三分の中で知った。

☆★プラネタリウム　春の夜空

インフィニウム（最新式プラネタリウム）でグラフィカルに紹介される春の夜空・銀河はいながらにしての宇宙体験そのもの。

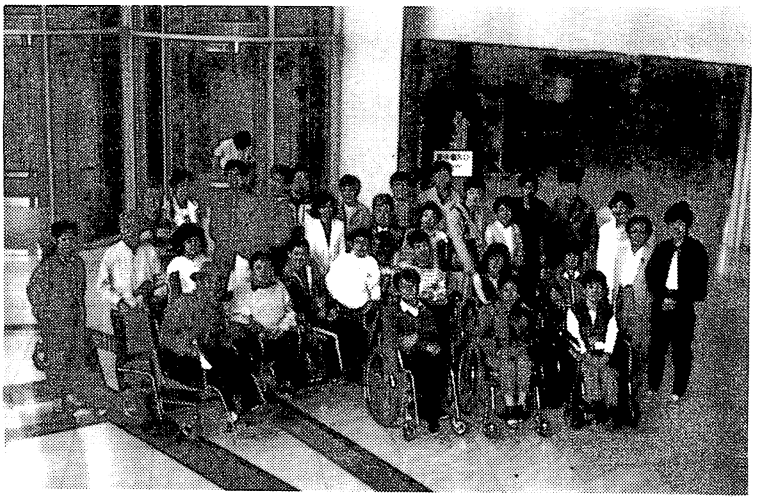
なじみのオリオン座を南西に見る。南の空のしし座の一等星レグルスが見つかる。この星から上の方へ点々と星をつなぐと、？を裏がえした形になる。その形から「ししの大鎌」と呼ばれ、これが見えるようになると吹く風に春を感じるようになる。ぐっと首をそらして北斗七星を見る。

我々は銀河系と呼ばれる、一千億個の星のあつまりの中に住んでいる。銀河系は、直径約十万光年もある大きな天体である。このような天体は宇宙にはたくさんあり、「銀河」と呼ばれている。肉眼では、その姿はとらえられないが、いまの季節には、たくさんうかんでいる。何百万光年も何億光年も遠くにある銀河が宇宙空間にどのように分布しているか…。

サロン・あべのは「銀河から宇宙へ」神秘とロマンの世界にしばし、スケールの大きい旅をした。

時間がなくて一階の「あかり」の歴史の展示場だけを一巡して、五時過ぎ無事に西田辺に帰着した。この日の参加は、三一名。

写真・・松谷裕子さん。



科学館での出会い

「寝てて、ごめん」

吉田　のり子

先日は、お疲れ様でした。

お手紙　いただいたのですが、プラネタリウムでは、終始寝てしまってほとんど覚えていません。

昨年の夏、バザーの値札つけ以来、二回目の参加となり、車イスの介助も初めてで本当にお手伝いどころか、足をひっぱっていた感じで申し訳なかった思いです。

旭さんからサロンのことは、いろいろ聞いていましたので、参加できる時はおじゃまさせていただきたいです。

感想でなくて、すみません。

メインストリーム講座に参加して

南光龍平

西宮で三月十七日から四月二八日までの毎週土曜日、七回連続で開かれていた「メインストリーム講座　自立ー今　立つ時！」に参加してきました。

この講座を主催したメインストリーム協会は、昨年西宮を中心に行われた「車イス市民全国集会」の実行委員などを主なメンバーとして発足したばかりの活気に溢れたグループ。自立したり、又これから自立しようという障害者にアテンダントを紹介することが活動の中心です。本格的に動き始めるのは五月からで、まずはこの会のお披露目と勉強会を兼ね、そしてアテンダントの人材を確保することもこの講座の目的のようでした。

七回の講座のうち二回は、障害者と健常者がそれぞれいくつかのグループに別れての介護実習。一回目の身辺介助の実習では今後の問題として障害が重くなって一人では入浴できなくなった時のために、いかにうまくお風呂に入れて貰うかを、実際にお風呂に介助者と一緒に入っての体験学習。

もう一回の外出介助実習では、西宮近辺を阪神バスを乗り継いで散策。甲子園球場へ立ち寄ったりして、楽しみながらの実習でした。

他の五回の講座は、以前サロン・あべのでもお話を伺ったことが有る、大阪府立大学の定藤先生によるアメリカ・バークレー市での障害者の自立生活の現状についての講演をはじめ、東京で有料アテンダントによる介助サービスを行っている、ヒューマンケア協会の中西正司氏や安積純子氏、同じく東京で障害者の所得保障確立を中心に活躍されておられる三沢了氏、そして神戸のポートリハビリ・サービスという自助具の開発販売会社でチーフアドバイザーをされている斉藤佳子氏、といったそれぞれの分野で現在活躍しておられる方々が講師として招かれていて、なかなか充実したお話を伺うことが出来ました。

特に、私が今一番関心を持っていてこの講座に参加しようと思うきっかけになった「ピア・カウンセリング」について語られた安積氏のお話にはピア・カウンセラーとして実際に活躍されている立場からの自信と余裕が感じられ、相手の話を全て受け入れて聞こうという姿勢には「心の豊かさ」の重要性を教えられたようで、強く引き込まれものがありました。

ご存知の方もおられると思いますが「ピア・カウンセリング」というのは、一九七〇年代にアメリカで始まった障害者自立生活運動のなかでも大きな位置を占めるもので障害者自身がその様々な経験や知識を分かち合うことによって、精神面・心理面のみのカウンセリングだけではなく自立生活を営んでいく実践面でのサポートも、障害者同士で行なっていくカウンセリングの形態です。日本では、まだまだ一部の自立障害者のあいだだけで行なわれているのが現実です。

今回参加した、メインストリーム講座はこのピア・カウンセリングの入門編といったものでしたが、これからも機会あるごとにピア・カウンセリングについての知識や技術を吸収して行き、何かの役に立てることが出来れば、と改めて思っています。

免れていること

ぼくには、もうずいぶん前から、まるで影のようにつきまとっている問いがある。それは「なぜ、免れているのか」という問いである。世には実に多くの苦しみや不幸があるにもかかわらず、なぜ自分は免れてきたのかという疑問である。

カンボジアでは学生たちが、ジャングルに追いやられ殺しあいをするように強制されている。逃亡すれば銃殺である。なぜ、あのジャングルのなかで死んだ学生が、自分ではなかったのかと思う。

何人もの人を殺し、死刑の宣告を受けた男の生育歴は実に悲惨なものだった。ぼくが、殺人へと導かれるような生活環境にいなかったのはなぜなのだろう。

そのような問いは誰にでもあるのではないだろうか。

あるドイツ人の神父さんから聞いたことだが、彼は、学生時代、哲学の道を進もうか、神学を勉強しようかずいぶん迷っていた。そんなある日、いつものように学生仲間とビールを飲んで歌っていたのだが、戦争中のことであり、突然、空襲におそわれたのである。気がついたときには、さっきまでいっしょに歌っていた友人たちは、手足がバラバラになって死んでいた。彼は、そのとき神父になろうと決心したそうだ。

社会福祉の仕事をしていると、多くの苦しみや困難をかかえている人との出会いが続く。差別のような社会の悪意からくる問題もあるが、死や病や人間どうしの葛藤など、誰の責任でもないほとんど運命的といってよいような問題も多い。

そのような問題をかかえた人と出会うたびに、ぼくは、なぜ自分にはそういうことが起こらなかったのか、なぜそのような苦しみから免れたのだろうかと思う。

大阪の釜が崎という日雇い労働者たちの街で、ぼくは二年半ほどボランティアとして、特にアルコール依存症になった人たちと顔をあわせていた。

そこでぼくが知ったのは、結局「飲んだくれ」になって道に寝て、時には凍え死んでしまう男たちも、決して特別な人たちではなかったということである。ぼくは、彼らと比べて自分が優れているところを探そうとしたが、特にそんなものはなかったような気がする。カップ酒の空きびんに囲まれて道に寝ころぶ男たちが、他ならぬ自分であっても不思議ではなかったのである。

そう思うと、とても不安になる。いつか自分も、孤独になり酒ばかり飲むようになり、職も家族も失い、冷たい路上に寝るようになるかもしれないと思う。

釜が崎の活動から、ぼくが急速にキリスト教に近づいたのは、そういう理由があったのだろう。釜が崎の路上に眠る人に、自分との違いを発見できなかったぼくは、キリスト教に近づくことによって、「違い」を作り出そうとしたのかもしれない。

いや、というより、路上に眠る人にぼくがならなかった理由を見つけられなかったために、つまりぼくが「免れた理由」が理解できなかったために、それはもう人間的な理由ではないような気がしたのだ。自分が「免れている理由」がわかれば、「免れ続ける」ことも可能であろう。しかし、そんな理由はどこにもなかったのである。

だからこそ、「免れ続ける」ために、人間的でないもの、理解しがたいものに近づく必要があった。そうすることによって、「免れ続ける」ことを無意識のうちに求めようとしていたのだと思う。

しかし、そんなことは全く無意味なことなのだ。

「らい」の治療に取り組んだ女医が、やはり同じような問いをもった。なぜ彼らが病にあり、自分はそうではないのかという問いである。その問いは、いつの日にか解ければいいというような悠長な問いではなく、日々の実践を誠実にやり抜くために、本当に応えを出しておかなければならない真摯な問いであった。

彼女の応えは何であったか。それは「この人たちは、私の代わりに病を負ってくれた」ということだった。病があり予防する方法がないとき、誰かがその病を負わなければならない。それは自分であるかもしれなかった。自分がその病を免れたのは、その人が負ってくれたためだと気づいたのである。

それは彼女の応えであった。先の神父さんもまた彼の応えとともに、神父の道を歩んだのであろう。

ぼくはどういう応えをしなければいけないのだろう。自分だけの自分にしかない応えを見つけないかぎり、苦しみを負い、困難に出会っている人たちとの関係は、本当に誠実なものとは成りえないと思うのである。

（知）

THE DEAF MUTE 35

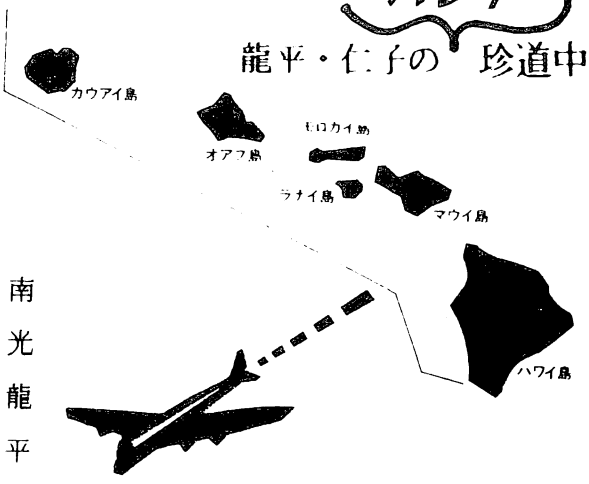
旭　純子

前回は二回にわたって大阪市地域福祉計画（ファインプラン）すなわち，参加する福祉・総合的な福祉・在宅福祉をかかげ、皆が等しく幸せに暮らせるファインな（素敵な、快適な）社会を作り上げる計画についてみてきた。そしてファインというのは

FはFull participation「完全参加」
IはIntegration「統合化」
NはNormalization「ノーマライゼーション」
EはEquality「平等」をさしているが，このNormalization「通常化」，Integration「統合化」，Particilpation「参加」は「国際障害者の十年」のメイテーマ「全面参加と平等」の具体化三原則であり、障害者の地域における日常生活を保障し、一個人として総合的生活保障を行い、社会参加を促進することを意味している。これらの視点に立った権利追求と主体的社会参加が今後のろうあ運動の鍵となるであろう。そのようなろうあ運動の展開がろうあ者の「全面参加と平等」の実現につながるのである。

ろうあ運動の基本的命題は、ろうあ者の人間的成長を図ることであり、主体的に活動するための条件作りであるといえる。

ハワイ 龍平・仁子の珍道中 ⑦



いいムードでおどる

南光龍平

案内されたのは、ホテルのフロントのちょうど裏側にあるこじんまりとしたラウンジ。ライブハウスといった風景の一角だった。（とはいっても、カラオケスナックなら何度か行ったことがあるが、ライブハウスなどという酒落たところには、とんと御縁が無く正直なところあまり知らない）

キーボードにアンプ、ドラムもありその前には何本かのマイクが立っている。丸いテーブルが四つほど。私たちの他には未だ誰もいない。

各々飲み物などを注文したりして待っていると、しばらくしてバンドのメンバーが現われる。女性ひとりにテンガロンハットの男性、そして黒人もまじえた数人の小さなジャズバンドだったが、始まってみると歌と演奏にはなかなか迫力があった。

もともと乗りやすいタイプの私、演奏が始まるとすぐにリズムに合わせて身体が勝手に動き始める。徐々に興が乗ってきて、その動きもだんだんと大きくなってくる。

もちろん、自分では少しくらいはさまになっているつもりなのだが、他人様の目から見ればC・P・特有のアテトーゼか、はたまたその昔はやったモンキーダンスの出来そこない。その程度のもので人前で披露するような代物ではないのだが、本人にとっては結構楽しんでやっていて、旅先という気楽さも手伝い大フィーバ。次から次へと変っていく曲にあわせて、汗をかきかき息を弾ませて、精一杯体を動かす快感にしばらくは酔っていた。

そんな私につられたのか、普段こんな場面ではあまり派手に、はしゃがないような感じのほかの二組のご夫婦もだんだんとリズムに乗ってきて、それぞれにいいムードでダンスを楽しんでいる。特に、お揃いのアロハとムームー姿のMさんご夫妻、スローな曲に合わせ手を握ってチークダンスのような雰囲気で、ゆったりとリズムをとる光景はまるで新婚さんの様。アツアツの、そしてほのぼのとした空気がフロワー全体に拡がっていた。

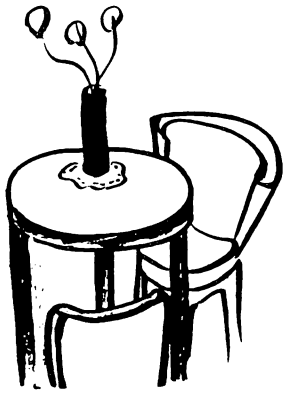
一方Nさんご夫妻は、私たちより後にラウンジにやってきていた、如何にもアメリカの初老の紳士といった感じの人にリードして貰って、うまく音楽に溶け込んでいけた様子。

バンドの人たちにも、私たちは好感を持たれた様子で、小一時間の演奏の後で休憩に入る際に「又、戻って来るから絶対に帰らないでいてほしい」と言われた程。

結局、それから又一時間あまりバンドの人たちもガンバリ、私たちもガンバッてハワイの夜は賑やかに更けていった。

（つづく）

美智子のこんな話



岸田　美智子

トイレ派：おしめ派？

療護施設などを訪問する事が多い私は、施設障害者から色々相談されたりグチを聞かされたり（手紙などでもあります）するのですが、その中でどっちにもつけないで困ってしまう話があります。

おしめの人の交換回数が、一日に六回から八回にふえたので、寮母さんの手が取られてトイレ派は困ってしまうと言うのです。

おしめ交換が一日に八回というと、それだけでとても良い施設であり病院なのだそうです。

私の友達の施設障害者の彼女は「ここはおしめしている人には天国やけど、私達には地獄やで」と口をとがらせて話してくれます。

寮母さんの人数を増やさないでやろうとするので、そのしわよせが全部いつも障害者の方へいくのです。施設職員の労働条件と施設障害者の生活は、シーソーゲームのようなもので、どちらかが上がればどちらかが下がるのです。本当は両方上がれば一番いいのですが……。

その結果同じ施設障害者で、なかよくやっていかなければならないのに、まるで敵対してしまうケースが今の厳しい施設の状態では多いのです。

ほかにも、同じ部屋の知恵遅れの人達の面倒を、その部屋の身体障害者の人が、昼も夜も見ていなければならず、夜も眠れずノイローゼぎみになったりして、「知恵遅れの人はその人達ばかりの施設に入れるべきだわ。」などと言う差別的な方へ行ってしまうのです。何故、もっとなかよく工夫して施設生活を良くして行く力にならないのでしょうか？

いつも、どちらにもつけず悩んでしまう私なのですーーー。

皆さんは、どう思われますか……？

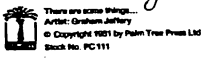
イギリスからのおたより

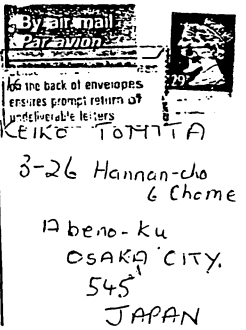
April 10th 90

Every blessing
this Easter
I do hope you are
quite well

MYOTONIC DYSTROPHY GROUP
IS GROWING. MANY FAMILIES
BEING CONTACTED

love Margaret.





冨田　慶子さんへ

この復活祭のときに　すべての人の上に
神さまの祝福がありますように

あなたが元気に過していらっしゃることを　願っています。

筋ジストロフィーのグループは、だんだん大きくなっています。多くの家族が連絡を取りあっています。

マーガレットより

お顔なじみ

中野君江

去年十二月号（四二号）に、「えき」で投稿しましたが、その後の経過をあれこれ書いてみます。

毎週、ＪＲ阪和線美章園駅から天王寺駅へ、ここで関西線に乗りかえ、時間待ちの電車に乗り込みます。天王寺駅ホームから関西線への乗りかえは、ホーム迄三分しかない。心せきつつも、階段を一つ一つおりて行く。

「待ってゝな、私乗るのだから…」

ホームに下りてからも、一歩でも二歩でも前の車両へと進む。「障害のある身、そんなに時間をきちんきちんとせんと、行きや」と息子に言われるが、時間通りの移動に間にあって乗れたと言う満足感がいい。座り勝手のよい左側の席をさがして座る。

ルルル…。

「やれ、やれ…」発車。一駅二駅過ぎて、目的地の加味駅に下りる　階段を上がり、改札口で降車客が通り過ぎる迄待ち、駅員の方に「介助をお願いします」と声をかける。するとあたりをキョロキョロ。私が介助人と間違われたのか

「車イスですか？」

「いいえ、私ですが、階段を下りる介助です」の答に、

元気そうなのにと不審顔。でも、ボックスからすぐに出てきて下さる。

「お忙しい中、すみません」と頭をさげつつ、

駅員さんの肘くらいの袖を軽く持って、一段一段下りる。これも四、五回でやっとなれたが、タイミングが難しい。四ヶ月が過ぎた頃から、駅の方とも慣れて改札口で切符を渡すと、顔を見るなりすぐに出て来て下さったり、二七段の階段を下りる間にも言葉を少しかけて下さる様になりました。最後の段の時「ありがとうございました。又、お願いします」に「お気をつけて行って下さい」の声、感謝の心一杯になる。

「早く一人でボツボツでも下りられる様になりたいわ」と思うけれど、この駅の階段は傾斜も急だし、段差も少し高いし、手摺もない、なんとも心もとない。

治療のための外出で、この駅に降るようになって八ヶ月、道路にもなれて喜んでいましたのに、この四月に、人事移動があったのでしょうか、お顔なじみの駅員さんに出会わなくなりました。それで、新しい方また一から事情を説明して介助をお願いしています。

今の方々とも、早くお顔なじみになっていきたいなと思っています。

＃感謝します＃

カンパ・切手・冊子、バザー用の品等、ご協力ありがとうございました。

お礼を申し上げます。

四月のカンパ　金七〇〇〇円

岡崎美智枝、黒羽玲子、小西千代子、斉藤孝文、富田万里子、矢嶋博士、匿名三名様。（敬称略）

おしらせ

6月の出会い

日時　平成二年六月十六日（土）
　　午後一時～四時
場所　育徳コミュニティーセンター
　　研修室（車イス・スロープ有）
内容　親ばなれ、子ばなれ
　　「私の自立」
　　パネラー　川嶋雅恵氏
会費　なし
問合わせ　TEL・06-691-1028（冨田慶子）

∞サロン・あべの紙の朗読テープが出来ました∞

「阿倍野区ボランティア連絡協議会」の朗読グループのご協力により、サロン・あべの紙の録音テープを作っていただいています。バックナンバーは三八号から、四六号の分があります。サロン紙朗読テープご希望の方は、冨田までお申し出下さい。

（TEL06-691-1028）

＜サロン・あべの＞は、今年度で５周年目に入りました。障害者の地域参加を目標に、毎月の出会いを持ち、多くの方々とのふれあいが生れてきました。この喜びを時のままに流れることなく、一つの形に残したいと、二つの企画を立てました。

皆様のご協力をお待ちしています。

（５周年記念事業）

□「なんとかしてェ～な」のビデオ製作

サロン・あべの紙に掲載されている「なんとかしてェ～な」のビデオを作成します。

シナリオ・演出・撮影等に関心のある方お手伝い下さい。　（担当＝原田　仁）

□５０号記念紙発行

サロン・あべの紙５０号を記念紙として発行します。サロンのテーマ「出会い・ふれあい・助けあい」を基にして、自由に書いていただきたいと考えています。

サロンに関わりを持って下さっている皆様全員にご投稿をお願いします。

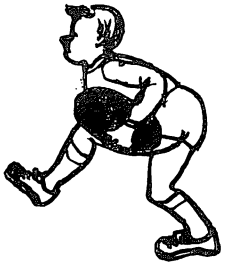
＊字数＝「ひとこと、ふたこと」の言葉から１０行（２００字内）まで。

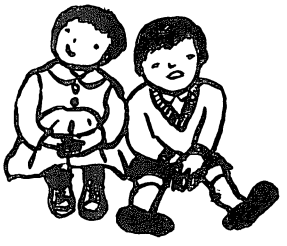
＊締切り＝平成２年６月２０日

（担当＝石田　律）

○問合わせ先＝TEL０６－６９１－１０２８

（冨田慶子）





〝障害者・健常者・子供たちの熱気、活気、笑顔を一つにして愉快な仲間が集る〟

《 第８回　走ろう歌おう大運動会 》

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

と　き；６月３日（日）午前 9時30分集合

ところ；桜宮小学校ｸﾞﾗﾝﾄﾞ（雨天時体育館）

［大阪市都島区東野田町1-10-19 ］

参加費；大人＝５００円、小人＝３００円

競技種目；音響走、バイバイ紹介ゲーム、

玉入れ、綱引き、フォークダンス等

申込先；杉若領子

［〒590-01堺市緑山台3-1-21-108］

問い合わせ先；乾　純一

［ 〒664 伊丹市南本町1-2-27

TEL0727-72-1505 ］

工藤正登

［ 〒662 西宮市問戸岡田町5-23

TEL 0798-52-4452 ］

＜サロン・あべの＞第４７号

発行日　　平成　２年　５月１９日（土）

発行・編集＜サロン・あべの＞運営委員会

［大阪市阿倍野区阪南町6-3-26

電話(06)691-1028冨田慶子］

印　刷　　セルフ社　電話（06)691-2365

［阿倍野区西田辺２－２－１０

グレース鶴ヶ丘１０１号］

定価　　￥６２．

花　と　緑　と　ハンズのなかま

なんでもハンズ第１回イベント

ボ　ラ　ン　テ　ィ　ア　大　募　集　！

リフトバス「なにわ」号で障害者と

花博の一日を楽しみませんか

日　時：７月１５日（日）AM.8:30-PM.6:00

（ 時間厳守 ・ 雨天決行 ）

集合、解散：大阪市立身体障害者ｽﾎﾟｰﾂｾﾝﾀｰ前

（ 地下鉄・ＪＲ長居駅すぐ
TEL.06-697-8681 ）

参加費：障害者＝￥３０００－

ボランティア＝￥１５００－

（ 昼食代は含みません。障害者手帳をお持ちの方はご持参下さい ）

申込み締切り：６月２５日（月）

―・―・―・―・―・―・―

「なんでもハンズ」は今年生れたばかりのニューウェーブのサークルです。障害者と健常者を情報のネットワークで結び、お互いに役立つ「モノ」を提供する。そんな目的で誕生しました。初めてみなさんにお届けする「モノ」は楽しい花博の一日です。ぜひ多くのみなさんのご参加をお待ちしております。

―・―・―・―・―・―・―

申込み、および問合わせ先

なんでもハンズ連絡先：南　光　龍　平

〒558 大阪市住吉区山之内1-7-8.

TEL.06-693-2367